

第1回 滋賀県社会教育委員会 概要

〔日 時〕 令和2年7月17日（金）

9:30～12:00

〔会 場〕 大津合同庁舎7-A

【出席委員（五十音順）】

板倉 正直委員	加藤 芳顕委員	金井 文宏委員	高野真知子委員
田口真太郎委員	橘 円 委員	富永美砂穂委員	永井 泉委員
平尾 香子委員	藤谷 忍 委員	藤村 祐子委員	藤原 麻美委員
宮本 麻里委員	望月 美希委員	吉田 尚子委員	(15名)

1 開 会

- 教育長挨拶
- 委員自己紹介
- 社会教育委員の職務等について

2 議 事

(1) 議長・副議長の選出について

- 議長に板倉正直委員、副議長に藤村祐子委員を選出

(2) 審議テーマ

「これからの地域を支える人材の育成・確保のための
社会教育・生涯学習のあり方について」

- 討議1：地域における人材育成・確保にかかる状況と課題について
- 討議2：生涯学習課事業について

3 閉 会

- 課長挨拶
- 事務連絡

【別紙資料】

資料1：滋賀県社会教育委員名簿 資料2：社会教育委員に関する法令、条例
資料3：審議テーマ、審議の進め方 資料4：学校を核とした地域力強化プラン事業
資料5：コミュニティ・スクール推進事業

資料6：人生100年時代の地域における学びと活躍推進事業

参考資料1：中央教育審議会答申（平成30年12月21日）

「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」

参考資料2：まち・ひと・しごと創生基本方針2019（内閣府）

1 開 会

- 教育長挨拶
- 委員自己紹介
- 社会教育委員の職務等について

2 議 事

- (1) 議長・副議長の選出について
- (2) 審議テーマ

「これからの地域を支える人材の育成・確保のための社会教育・生涯学習のあり方について」

【議長】

それでは、審議テーマに関わる討議に入らせていただきたいと思います。最初に審議の進め方について、ご確認させていただきますので、まず、最初に配布していただいております今期の審議テーマ、並びに今後のスケジュール等について提案説明をお願いしたいと思います。事務局、お願いいたします。

【事務局】（審議テーマと進め方について）

配布資料の4ページ目に「社会教育委員会議の審議について」がございますので、そちらをご覧ください。今期の社会教育委員会議のテーマは「これからの地域を支える人材の育成・確保のための社会教育・生涯学習のあり方について」で2年間かけてご議論いただきます。

まず、このテーマの設定理由、背景につきましては、配布資料の21ページにあります中央教育審議会（答申）をご覧ください。

「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」の答申の概要にありますように、今後の地域における社会教育の果たすべき役割としまして、人口減少、高齢化、グローバル化、貧困、つながりの希薄化、社会的孤立などの課題に対して、持続可能な社会づくりを進めるために、住民自らが担い手として地域運営に主体的に関わっていくことが重要であり、かつ人生100年時代の到来やSociety5.0実現のために、誰もが生涯にわたり必要な学習を行い、その成果を生かすことのできる生涯学習社会の実現に向けた取組が必要とされております。

また、今後の社会教育の方向性として「住民の主体的な参加のためのきっかけづくり」、「ネットワーク型行政の実質化」「地域の学びと活動の活性化する人材の活躍」を実行していくことが重要であり、「開かれ、つながる社会教育の実現」を図っていくことが、新しい社会教育の方向性であります。

特に本県ではこうした新たな社会教育の方向性を実現していくためには、人材の育成・確保が急務であることから、このテーマを設定いたしました。

具体的な審議内容については、4ページにありますように、①既存の事業、団体の変化に伴う社会教育のあり方、②多様な主体の分野を超えた連携・協働、③住民の主体的な参加や学びと活動を活性化する施策、④次世代を担う地域リーダー育成のためのプラットフォーム、⑤人生100年時代の地域における学びと活躍推進事業についての5つについて具体的に審議いただきたいと思います。

審議のスケジュールとしましては、先ほど議長のお話しにもありましたように、年2回の会議すなわち2年間で4回の会議を開催しテーマについて論議していくわけですが、5ページの審議の進め方にもありますように、会議と会議の間に任意であります。現場の視察やオンライン会議等も活用しながら議論を深めてまいりたいと考えております。

また、社会教育委員の職務の中に教育委員会で意見を述べることもできるのであります。今期は教育委員さんとの意見交換をする機会を設けたいと計画しています。時期は、まだ、未定ですが「ふれあい教育対談」にもエントリーしておりますので、2年間の中ほどで開催させていただき最終のまとめに活かしていきたいと思っております。

最後に、今期の社会教育委員会では提言書というこれまでの形式にとらわれず、市町教育委員会や一般県民の皆様これから社会教育の方向性を分かりやすく伝えたいと考えています。イメージとしましては、滋賀の社会教育・生涯学習の未来地図のようなものを皆さんと一緒に描いていきたいと考えており、未来を表した絵地図の中に学校や地域での学びや仕組みを表現したり、人材の育成の具体事例もおりませで表現できればと思っております。また、皆様から良いご提案、ご意見を賜ればありがたいです。

簡単ですが、審議のテーマおよび進め方について説明させていただきました。

【議長】

今の事務局の説明に質問とかございましたら、よろしいですか。

後半に、また事業説明の後に、フリートークというか、それぞれ委員の皆様、お一人お一人できるだけご意見とか、今回の思いとかを言っていただく時間がございます。あとの前半11時までの時間については、最近の研修会でよくありますが、それぞれ近くの方とお話していただいて、どんなことが話になったかというのを、後ほど全体場でシェアしていただくという形で11時までお願いしたいと思っております。どなたかが代表で話していただくということをお願いしたいと思っております。それでは、3人グループになってお話を少しお願い致します。

《グループ協議》

○論点①：地域における人材の育成・確保にかかる現状と課題について

○方法：3名のグループに分かれ論点について協議する

【議長】

大変短い時間ですが、後半の時間で、それぞれの皆様のご意見、思いをさせていただきます。それでは、11時までということで、5グループの各代表の方、順番に発表をお願いします。

【委員】

議長、副議長から指名されました。テーマについて詳しくは話し合えてないんですが、私も、それから議長さんも派遣社会教育主事のOBです。滋賀県の場合は、派遣社会教育主事というものがなくなって、地域と社会教育の分野でつながっていく世界を今後どうやって維持していけばいいんだろうかという話をしていました。

私も、そのOBで学校の教員ですが、その当時いろいろお世話になった地域の方々、いろんな各種団体の方々との人脈が、今の仕事の支えに非常になっております。副議長も滋賀大学で教鞭をとられておりますが、今の学生たちが社会教育主事の資格になかなか注目しない。それは、社会教育主事の資格を取って、その後どういった分野でどんな活躍ができるのか。そういったビジョンが十分把握できていないのではないかな、ということを手ながら思っております。

そういった意味では、滋賀のみならず、社会教育の今後の持続可能な状況を作っていくためにも、そういった若い世代、あるいは学生たちにこういったことを学んで、こういった分野で、活躍する意義みたいなものを、大いに発信していく必要があるのではないかなという話を3名でしておりました。

【議長】

ありがとうございました。次の方、お願いします。

【委員】

われわれのグループは、ひとまず現状について確認しました。甲賀町の中学校の方で、地域とつながりの深い事例を3点ほど紹介していただきました。

まず、1点目は、地域の方から協力金というものが代々集められて、それが中学校部活動とか地域のための活動に活かされているということです。

2点目で、若い世代をどう取り込むかということで、「ござれ GO-SHU!」というものがあり、江州音頭をよさこい風にアレンジしたものでその踊りを伝承するという形で地域とのつながりが生まれ、体育祭で披露するということです。

3点目としまして、部活動に対する指導員について、そういう支援が地元の人を中心に行われているということ、これも一つの地域とのつながり、人材の継承というか、そういう厚みのある教育活動につながっているという報告でした。甲賀市は、地域の行事やお祭りがまだまだ根強く残っている大変素晴らしい地域なんですけれども、そういったものに参加する学校側のメンバーがどうしても校長に限られてしまって、夜の会議とかは働き方改革もあって教職員が出にくいという事情もあって、なかなか地域とのつながりが横に広がるということが難しいという状況です。以上です。

【議長】

ありがとうございました。お願いいたします。

【委員】

私たちのグループは、それぞれ自分たちが活動しているというフェーズでお話をさせていただきました。その中で、参画をする人も少ない、減少してきているなという課題が一つ挙がってきました。いかに、目の前にある地域の課題ですとか、そういったものを学校教育とか子どもたち自ら問題としてもらえる。それで、大人になったときに、その課題と向き合うとか、地域に参画するというハードルを、負担とかそういうものに感じるのではなくて、自然に受け入れられるようなつながりづくりが大切なのではないかなというお話をしていました。

長浜の委員の子育て応援カフェの方でも、「運営される側の方はどうなんですか」というお話を伺ったときにも、「続けていくことで少しずつお母さん方が運営をするとか、自主的に動くところに意識が向いている」というお話も伺いました。そういった部分で、例えば子どもたちは、学校教育を終えて

大人になると、青年団とかそういった受け皿がある。そして、青年団も卒業があるので、そうすると子育ての分野の例えば PTA の活動とか、そういった形で地域課題に対して、次の分野で自分たちの活動をライフワークとして続けていける。その縦のつながりをいかに連携していくか、ということが、人づくり、人材育成では大事ではないか、というお話をさせていただきました。以上です。

【議長】

ありがとうございます。

【委員】

短い時間だったんですけど、社協で活動をされている委員さんとひだまり学舎事業の林という地域でされている委員さんと2人にヒアリングさせていただく形で進めました。

大きく僕の中ではキーワードとして3つ出てきたのかなと思います。順を追って説明しますと、一つ目は、地域の中で子どもを育てるといふこととの関係をどうやって作るか。これは子ども食堂をやられている事例を、いろいろご紹介いただく中で、一つは子育て世代のボランティアで運営されていることと、コミセンさんとか社協さんもそうなんですけど、もう一つはリタイアされた層がお手伝いに来られている。それから、子ども食堂というものの自体は、やっぱり料理ができないとなかなか参加しにくいというところもあるので、男性の方の参加は難しいよねという話もありました。世代間のつながりができているものの、それだけではちょっと多様性に欠けるんじゃないか、みたいなことも課題としても出ていました。ただ、地域の中で子どもを育てるといふことが、世代間をつなぐというのが一つのキーワードかなという話がまず一つありました。

2つ目は、地域に搾取されない関係という関わり方をどうやって作るかというのも大事だよという話がありました。これは長浜での大学生の参加の事例です。大学生がワークキャンプという取り組みを長浜でされていて、例えば長浜の冬、除雪のすごくしんどい作業だったり、夏は水路の泥かきの作業など、地域が高齢化していったなかなかできないところを、学生がワークキャンプということで入ることによって、そういった地域ならでの昔からの作業をお手伝いする。そうしながら、ただただ学生にボランティアをしてもらうのではなくて、実はそれを通じて地域と交流が生まれて、そこで昔ながらの伝統的な住まいだとか、生活の部分を学んでもらうということが目的で、学生たちに頼る。でも、あくまでも交流が目的というところを重きに置いているところがすごい取り組みだなということでも聞かせてもらいました。

3つ目のキーワードが地域の外と中の付き合い方というのをどうデザインするかという話がありました。これはひだまり学舎での竜王での林というエリアでの取り組みです。委員さんが取り組まれている中で、ひだまり学舎という拠点を持ってママさんたちがいろんな活動をできるように支援もしてあって、20代から40代のいろんな層が参加して、子育てだけではなくて、いろんな事業が生まれている。ただ、そうやっていろんな事業が生まれてくると、今度は逆に地域の人たちがあそこに頼んだらいいみたいな、あそこに何でもお願いしたらいいというふうに、依存関係になってしまう。地域の人たちはあの人がいれば全部やってくれるみたいな、あれもこれもやってみたいな……。どんどんいい意味で依存してってしまうことも発生してしまう。そういう意味で、外から来るママさんたちとか、何かをやりたいていという人たちと、中の人たちとの関係をどうデザインするかというのが非常に重要なのでは

ないかなというお話もありました。

その一つの解決としては、個々の事例でいうと、例えば子ども食堂もやっているし、保育もやっているし、というのでいろんな事業を通じて一部の人だけじゃなくて、いろんな事業の関係者を増やす。そして、あそこのひだまり学舎は、本当にいろんな人がいて、いろんな人が出入りしているということで、中と外との関係性というのをいっぱい作っていくことで、何とか解きほぐそうとされているんじゃないか、と聞いていました。簡単ですが。以上です。

【議長】

ありがとうございます。お願いします。

【委員】

地域・企業・行政と学校が連携して、社会体験を通して子どもを育てることが、これから重要ではないかなという話をしました。

新しい文科省の指導要綱で「社会に開かれた教育課程」という項目がありまして、生きる力を学校の社会に開かれていって、教育課程の中に、地域や企業を取り込むということが今後の課題になっています。ごめんなさい、何か文科省みたいなこと言いました。

それで、最初にダイハツさんの方から、トイレ掃除ということテーマに地域に入っている。私もトイレ掃除になると、なんとなく離れてゴシゴシしますけれども、たわしを手に持って便器に近づけてこするというを自分も一緒になってやる。自分も子どもに学ばせてもらっていると言いましたが、そこで子どもたちが汚れの細かいことに初めて気がついて、「なんでこんなに汚れているんだろう」と考え出したり、磨いた後の気持ちを体験する。そういうことをやられた後に、これは大事だと思うんですけど、必ずもう一点、子どもたちで話し合っリフレクションをする。一体自分にとってどういう意味だったかと、リフレクションもすると聞いて、ほとんどの学校はやられていることと同じだなと思いました。

委員さんの方は、キーワードが支援する・してもらではなくて、協働するということが大事だと。コミュニティ・スクールで今まで地域の人が学校を支援してきたけれども、逆に、地域も弱まっているので、ほぼ大人に近い体力を持ち、自分で考える中学生だった地域に行って何がしかの貢献できるんじゃないか。というので、自治会さんと話し合っ、神社の落ち葉が散って大変だというので、中学生にヘルプしてお願いしますと言ったら、そこで大活躍してくれました。そういうようなことを通して子どもたちも、地域の何がしかの課題、落ち葉も課題なんですね。それを解決したということの体験をする。

あるいは、地域でカフェなんかやっていますけど、だいたい高齢者しか来ない。そこに中学生が何人か行くと、一気におじいちゃん、おばあちゃんと若い子たちの会話があって、お互いに珍しいものだから、話し合うという効果がある、ということでやられていました。

私の方から、大阪市コミュニティ協会というところでやっていますけれども、代表的には十三中学校というところで、その淀川堤防が決壊すると、5mぐらいつかるのです。一番地域で高いところが堤防の上なんです。他は全部つかるので、そういうところで、防災を中学の生徒と一緒にやっています。中学は部活が一番チームワークがあり、統制も取れているので、サッカー部とか野球とか、今のところ

男子だけにしていますが、土のうを積む訓練とか、最近は堤防が決壊したときに備えて、堤防のところに積んでいって上からしっかり固めるということもやっています。これはかなり危険なので、堤防が決壊しかかっているところに中学生が行くというのはかなり専門家の判断もいるので、江戸川の河川事務所と一緒にやっています。

河川事務所さんの指導もあって、そういうふうに淀川区役所とか行政さん、あるいは商店街。もともと十三中学校は荒れていた中学校だったので、中に地元の和菓子屋さんが、「桜餅をこうやって作るんや」と家庭科の授業に行き、「ここが一番のミソ。こうやったらおいしいんやで」ということを教えると、子どもが単に家庭科で習うんじゃないでなくて地域の人たちはこれで稼いでる、ということを実感するみたいこともあります。これも社会に開かれた教育課程だと思います。

学校が社会に開かれ、地域が学校と協働して、地域課題を解決するという時代になっているのかなと思いました。お二方のお話を聞かせてもらって、ベクトルは近いかなと思いました。ありがとうございました。

【議長】

ありがとうございました。それぞれのお立場で、普段感じておられることとか、考えておられること、今の話題、地域における人材育成とか現状についていろいろお話ししていただきまして、ありがとうございます。

それでは、先ほども申しあげましたけれども、ここで5分程度の休憩を挟んで、後半、事業説明の後、それぞれのお立場で実践されている取り組みやこんな団体があるよとか、さらに審議を深めていきたいと思います。

今度も限られた時間ですので、全員揃ったところで始めさせていただきたいと思います。

《 休 憩 》

【議長】

それでは再開させていただきます。ここでは、生涯学習課の主な事業につきまして、いくつかご紹介いただけるということで、その後、フリートークで12時前までお願いしたいと思います。

それでは事務局をお願いします。

【事務局】（学校を核とした地域力強化プラン事業について）

本県における「学校を核とした地域力強化プラン」の事業概要および進捗状況、について説明させていただきます。それでは資料6ページを御覧ください。令和2年度の「学校を核とした地域力強化プラン」事業全体図となります。

本県では、「地域とともにある学校づくり」に向けて、学校と地域が組織的に連携・協働する体制をつくる地域学校協働活動事業、コミュニティ・スクールの設置等の取組を推進しております。

地域学校協働活動とは、幅広い地域住民等の参画を得て、学校と地域が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動です。地域学校協働活動の推進のために、地域学校協働本部が整備され、地域学校協働活動推進員というお立場の方が、学校と地域をつなぐコーディネーターの役割を担って

います。

具体的な活動の中身としましては、登下校の見回り、学校周辺環境の整備、授業の補助などの学校に対する協力活動、小学生対象の学習支援活動である放課後子ども活動、中学生対象の学習支援活動である地域未来塾、などがあります。今年度、地域学校協働本部は県内 12 市町 128 本部の設置となっております。

この地域学校協働活動と一体的に推進しているのが、コミュニティ・スクールです。コミュニティ・スクールとは、学校運営協議会を設置した学校を指します。学校運営協議会では、教育委員会により任命された委員が学校の運営と必要な支援について協議されます。ここで協議された内容が、先ほどの地域学校協働活動での充実や活性化につながります。今年度、コミュニティ・スクールについては市町立小・中学校 160 校、県立学校 15 校で導入の見込みです。

地域学校協働本部から、学校応援団等市町独自の類似事業に至るまで、これらに取り組む公立小・中学校の割合は、事業によって差はあるものの、市町の御協力により年々拡大し、重複を除いて、本日で 95.2%となる見込みであります。以上で「学校を核とした地域力強化プラン」事業についての説明を終わらせていただきます。

【事務局】（人生 100 年時代の地域における学びと活躍推進事業について）

続きまして、私の方からは「人生 100 年時代の地域における学びと活躍推進事業」について説明をさせていただきます。こちらにつきましては新規事業となっております、地域づくり型生涯カレッジとして市町でも講座や研修会等を実施していただいております。

その中で、カレッジを受講して修了いただいた方の個におけるところが多く、その活動の広がりが十分ではないのかということから、分野を超えた交流の場の設定により地域の学びと活躍の好循環につなげる取組が必要であるという課題が見えてまいりました。

そこで、これまでから行っている社会教育関係者の研修・交流の機会だけでなく、図にあります 3 つの研修会とメニューフェアを計画してみました。

一つ目は、他分野連携型研修会です。これは、多様な分野から毎年一つの分野を設定しまして関係機関、団体での全国的な先進事例や取組を互いに学びあうものです。

二つ目は、生涯学習・社会教育研修ということで、最新の国の動向や学術理論を学び、ネットワークを広げることを目的に実施する予定です。

三つ目は、学びを生かす地域活動メニューフェアということで、学習者と多様な分野の活動団体が集まりまして、ブース出展をしていただいで、それぞれの活動の紹介をしていただきながら情報交換をしていただくことを考えております。

今回の新型コロナの影響で変更をさせていただきます。

先ほど 3 つの研修会と申しましたが、当初 6 月頃に他分野連携の研修会する予定をしておりましたが、現在、10 月頃に密にならないような工夫をしながら実施する予定をしております。二つ目の生涯学習・社会教育研修につきましては、滋賀県社会教育研究大会と共催をさせていただきます実施する予定をしております。

最後に学びを活かす地域活動メニューフェアですけれども、こちらの方は今年度見送りをさせていただこうと考えております。当初 200 名程度、20～30 団体集まっていたいでそれぞれの活動の

情報交換をしていただく予定をしておりましたが、市町の様子を聞いていますとカレッジの実施を見送っていたりしている状況でもありますので、来年度改めて計画させていただこうと思っております。

先ほど、申しあげました他分野連携研修につきまして、まちづくり、福祉、防災をテーマにして計画を進めてまいりますので、委員の皆様からも地域での学びを活かす上で、こんなテーマが良いなど教えていただきたいと思っております。地域での人材育成やつながりをこれらの研修会でより具体化し地域活動を活性化していきたいと考えておりますので、ご助言のほどよろしく願いいたします。以上です。

《全体協議》

○論点②：生涯学習課事業（人生100年時代の地域における学びと活躍推進事業）について

【議長】

ありがとうございました。それでは、今、おっしゃったように具体的にそれぞれの立場で実践されていることと同時に、今、ご説明いただいた研修会等について、こんな団体があるとか、この研修はこうじゃないとか、具体的なご意見等をいただければ大変ありがたいです。

50分を目途に30分程度しかございませんが、できるだけたくさんのご意見を頂戴したいなと思うので、よろしく願いいたします。

それでは、最初に、議長権限で私からしゃべらせてもらっていいですか。私は子ども園の園長をさせていただいているんですが、今取り組んでいるのは、先ほど委員がおっしゃったように、コロナをうまく活用して、させる行事から子どもたちと一緒に作る行事に変えていこうと思っています。当初、10年かかる予定がコロナの影響で、1、2年で済むかなと思っています。

子どもたちと作る、させる行事から作る行事、そして、こんな語り合いを年長さん3、4、5才を中心にやっていきたい。語り合うというのはものすごく大事なかなと思います。その中で、自分で考え自分で決めて行動する。そうでないと、先ほど金井先生から防災の話が出ましたけれども、おびただしい数の情報を取捨選択して自己決定するには、スマホがすごく身近にある幼少時代から、そういうことを積み上げていかないといけない。そういう体験と同じような、しっかりした根っこの生きる力があって、人材育成の、皆様のような団体になるんじゃないかなと思っています。また、いろんなことを教えてください。

それでは、私はよくお人形とか持って、「はい、次の人、お願いします」と言って順番に回していくんですけども、それはできませんので、どんどん手を挙げていただいて、時間を有効に使いたいと思います。よろしくお願いします。どなたかございますか。どうぞ、お願いします。

【委員】

議長の方から話題提供があったように、コロナでいろんなものが変化してるなあというところで、地域での学びみたいところもいろいろあります。

コロナはまだ第一波だと思っていて、最近起きている議論です。近江八幡市内にボランティアの子育て団体さんが22団体、いわゆる近江八幡の社協さんとされている団体さんがそれだけいるらしいんです。団体の代表者さんは、だいたい現役子育てされているママさんだったり、子育ては終わって落ち着いていて、団体の代表をやられているママさんがたくさんいらっしゃるのです。

彼女たちと最近 ZOOM でオンラインミーティングする機会がありました。議論するだけだったらもったいないから、ちょっと会議に入ってくださいというわけで、若者で入らせてもらいました。すごく面白かったのが、初めてコロナで横の連携が必要とみんなが思っただけです。

それまで、子育て支援団体さんは、本当にいろんな活動をされているので、一口で子育て支援団体という僕なんかは分からなくて、みんなエリアごとにそれぞれ同じような活動をされているのかなぐらいに思っていたんですが、全然違って、ママさんの支援もしていたり、具体的に子どもさんの支援もしていたり、本当に個別にそれぞれやっていることと、ターゲットも全く違う。目指していることも違う。

コロナの自粛で何が起きたかという、公共施設が一斉に封鎖されてしまったので、彼ら彼女たちの活動の場がなくなってしまって、全員すごく困った。特に家庭内暴力が起きてしまったりとか、親が日中仕事に出ている間、学校給食でご飯を食べていたのが、ご飯が食べられなくて、どうしても親が忙しくて相手ができなくて、お昼はほとんど食べれない子どもが、本当に 100 人近くいたらしいんです。社協さんのボランティアの活動で分かったことです。

こういう困ったところでどうやって支援するかといったときに、普段、持ってないネットワークをそこでどうやって活用するかということがすごく鍵になっています。実は大学生とか若い人たち、地域で活動している人たちが、そういう人たちに弁当を配布する支援ができたり、横のママさんがこんなことをやっている、という相談ができる環境があれば、困ったときにすぐお隣さんに相談できたり。

今、改めてコロナが起きて、本当に個人でつながる必要性だったり、縦で割れていた組織だったり、今まで交えなかった人たちがちゃんと交わらないといけないよね、ということがすごく加速したなと思っています。特に、デジタルからこれだけ進んでオンラインのミーティングも簡単にできるようになったので、みんなどんどん活用するようになって、今、どんどんつながろうみたいな時代の変化になっている、というのをすごい感じています。

こうしたときに、実はデジタルネイティブと言われるような 10 代、20 代が簡単にスマホでつながるんです。40 代 50 代のママさんたちが LINE でつながるのもちょっと大変みたいところを、本当に子どもが簡単につなげて、「お母さんやってあげる」とオンラインでつながせるみたいなことが起きるので、どんどん子どもたちの役割がちょっと上がってきてるな、と感じます。改めてみんなでまちづくりだとか、地域をよりよくしようよとか、共助みたいなものが立ち上がってくるんじゃないかな、というのを最近感じています。

【議長】

今の新しいネットワークの話やスマホと子どもたちでもいいんですが、その他にはいかかでしょう。

【副議長】

今のお話と関連するんですが、私は逆に、ジェネレーションギャップがかなり広がっていることを実感しています。大学の中でも 60 代ぐらいの先生方が多数おられます。「来学期の授業をどうするか」というので、「原則、オンラインじゃないの」と思いながらも、「いや、大学の授業は原則対面です」と言われて結構議論になります。

いわゆる、年配の先生が、オンラインの授業で今学期、対応しないとイケないので、もういっぱい

っばいで、レポートとかも「学生たちにメールで添付するように」という指示をしたら、もうひっきりなしにメールがくる。「これではもたないから最終課題は、手渡しで提出させて大学に来させていいか」という議論になっています。「いや、いろんなやり方があるので説明します」。という話にはなりました。

私は、大学院生にも授業をしていて、納得性のある、例えば最初は戸惑いながら、いろんなアプリケーションを使いながらやっていて、こちらも手探りだったんですけども、学生も最初は戸惑いながらも、「動画が見られません」とか「課題の提出ができません」とか言っていたんですが、1、2週間たつと慣れるんですね。対応できないという学生は、全くいないです。しかし、大学院生の授業になると、原則現役の先生たちとかも派遣されて来ておられるので、どうしていいか分かりません、ということが多くてすごく苦労したんです。

やっぱりオンライン化が進むにつれて、若い世代とか、対応できる世代とできない世代の格差が結構広がっていて、逆に上の世代の先生たちがちょっとつらい思いをされている。こっちもばかにしてはいけないというのは分かるんですけど、若い世代が上の世代になぜ考え方変えてくれないんだろう、みたいな、その辺でちょっとギャップが出てきているかなと思っていて、ジェネレーションギャップを逆にどうやって埋めていくかというのが、今回課題になっていくのかなというのは実感しています。

大学の教員だけでネットワークを作ろうとしていてシェアしたり、分からない先生たちに教えたりとしていて、つながりをどういうふうに作っていくかというのが問題になるかと思っています。

【議長】

ありがとうございます。ジェネレーションギャップとつながりということで、どなたかつながってもらいませんか。はい、お願いします。

【委員】

私も60代なので、何もできない、メールとLINEはできるんですが、ZOOMはすぐに覚えました。ZOOMは非常に便利なのは皆さんもご存知でしょう。本当に目の前にみんなの画面が現れて、逆に、一对一のコミュニケーションが進んでいくというメリットがあります。

それは、教えてもらって、ZOOMの主催する方がメールを送ってくるとすぐ参加できるので、それをどなたかに依頼して、1回体験するとやめられないというか。こんな楽なことがあるんだ、ということがこの年になって分かりました。

だから、学習効果はおじいちゃんにもあるので、ぜひ教えていただきたいなど。1回体験すると結構それはどんどんやれると。

社会教育の大きな課題はつながるということだと思うんですけど、実際に語り合うというのを先ほどおっしゃいましたが、語り合うというのは一番大事だと思います。それができないときは、道具とかツールが大事になってくるので、それをいかに、ZOOMという会社を宣伝するわけではないんですけど、ほかにもTeamsとかあるらしいんですけど、私は全く知らないんで、そういうのをこの機会に年寄りに教えてもらうという運動をしてほしいなど。

コンテンツは若干高齢者が年の分だけ強いかもしれないですが、ツールは全然駄目なので、私もつい3カ月前までガラケーを使っていたまして、学生から笑われて。「こんなものがまだ日本にあるんだ」

と言われて、最近変えました。だれか教えてください。

【議長】

つながり、学習効果、体験。なかなか垣根が高くて、1回体験したら、それはいいんですが。それがなかなか。そのあたりで。はい、どうぞ。

【委員】

先ほどジェネレーションギャップとかいう話があったんですが、私も前任校で ICT 教育を進めていくにあたって、若い先生方の知識にはなかなか太刀打ちできない状況です。では、それに張り合うように自分も勉強するのか、ということではなくて、やはり若い世代の先生方の発想とか私たちの知り得ない部分とか、そういったところは、大いに認めて頼っていつています。

大事なことは、私にも分かるように説明してねということと、そうか、みんながそれを理解することが必要なんだということ、若い世代も配慮していく。それが子どもへの配慮に必ずつながっていきます。

私は土曜日、日曜日は野球の監督をしています。よくあるチーム、60歳70歳になったら、おじいちゃん監督がこんな顔して、「こうあらなければならない」みたいな指導しているんですね。そういうおじいちゃん監督にはなりたくなくて。委員の会社に勤めている優秀なコーチがいるんですが、今の若い野球指導者の感覚は、私たちの時代の野球とは変わってきている。そういう状況を受け止めて、うまくそこをつないでいくということが私は社会教育においては、本当に大事な分野だと思っています。

ただそれをうまくつないでいくためには、お互いがお互いの思いとか状況をオープンマインドに分かり合おうとする姿勢が必要だと思いますし、そういうつなげる人材をどこの組織の中にも作っていかなくかん。自分のことばかり主張する人間もいます。逆に良いこと思っているんだけど、出せない人間もいます。そういったいろんな人間をつなぐ役がいる。そういうポジションをいつも学校の中でも、そしてチーム運営の中でも、意識してふるまっている状況があります。つながりという部分でお話させてもらいました。

【委員】

私は、お母さんたち世代を対象にしている事業がメインなんですが、このコロナの時期には、セミナーをするのも最近選べるようにしています。オンラインで参加してもいいし、現場に来て大丈夫ですよということで、私たちが投影をするので、私たちの場所でオンラインに参加できるという形をとっています。それを選べるよ、というとまだまだお母さんたちの世代は9割参加をしたいという人が多いなというのを、いつも思います。

お母さんたちの環境は自宅でパソコンを開いてということなので、子どもを持ちながらのお母さんが、同じポジションにずっと立てるといふか座っていることすらなかなか難しい。だから、音を切ったり画面を切ったりできるのは知っていても、お母さんたちからするとオンラインというものは、かなりハードルが高いんだなと感じます。

ただ、自分たちで起業とか事業とかをしている子育て世代だと、簡単にたくさん使っている人が多

いので、私もこのコロナでお店をお休みしているときとかも、普段北の方にいるのでなかなか南の方の活動をしている人たちと本当に会うことがなくて、先ほど、田口さんもおっしゃいましたけれども、子育て支援団体同士がつながるといのは、本当になことなんです。今回、積極的につながってこうということで、何人かといろんなお話をさせていただいて、とても貴重な時間になりました。

やはり PTA とかの会も現場に集まることができないので、夜オンラインでしようといってもなかなか受け入れてはもらえないというのを、よく北の方では聞いています。もう少し、まずはオンラインになれる。私たちも1回やったんですけど、ただつなげるだけの時間、練習の時間、何もないけど、やり方だけ教えてあげるからという時間を持ったら、だいぶ敷居は低くなりました。そういう地道な活動がすごく必要なんじゃないかなと思います。

あとは少し関係ないところではあるんですが、地域でいろいろな人がイキイキ活動していくというところで、私たちは、子育て世代のお母さんたちが自分で事業をしたり、活動をする支援をしている中で、皆さん悩むのが続けていく、継続するためにはどうしたらいいんだろうというところなんです。壁に当たる人がとても多いです。

支援してあげたい。でも、その支援する相手からお金を取れないから、ボランティアの気持ちでもいいんや、という気持ちで始める方がとても多いんです。けれども、事業を始めて、ボランティアの形でやっていくと、1年とか2年したときにこのまま続けていきたいなという相談をとても受けることが多いです。

もちろん支援するという心はすごく大切なんですけど、これからは、それをどのように継続していくか、事業として運営していけるようになるかということも教えてあげる、ということも必要なんじゃないかなということも思います。以上です。

【委員】

学校の臨時休業の時に、それぞれ家庭のネットの環境がどれくらい整っているのかということのを、県内どこの地域でもどこの学校でも調べたと思います。90%あるかないかぐらいです。ですので、ネット環境が整っていないという現実があります。

あと高齢者のことを考えると自分自身が介護をしないといけないから余計に思うのですが、自分の母がガラケーさえも使えないという状況にあります。それで、つながるとい、オンラインを考えたときに、そこから漏れてくる人たちが本当は一番つながっていかないといけない、どこかにつながらないといけないしんどさを持っている人なんじゃないかなと強く思っています。

ですので、そこをどういうふうに埋めていくのかと思ったときには、地域の力ということはもちろん大切ですが、今、どうしたらつながっていけるかということも言ってあげるのは大事だと言われた、まさしくそうだと思います。関係機関といいますか、行政的な支援とのつながりをしっかりと体制として作っていく。そして、そのつなぎに地域の力が入っていくとか、そこら辺のことをしていかないと、必ずオンラインが堪能であると同時に漏れていく人たちがもっとしんどくなっていく格差が生まれていくのではないかなと危惧します。

【委員】

今の委員のお話を聞いて、つながりから漏れてしまう人ということで、引きこもりの方などは、これま

で学校の中で不登校になって、そのまま義務教育が終了した後に支援が途切れてしまって8050問題と言われる問題のように、40代50代になって、ようやく問題が表出してくる、というケースが多々ある。まさしくつながりから漏れてしまって、そのまま埋もれてしまった方だと思います。そうした方をどうやってつながって支援につなげていけるか、といった部分で非常に悩ましい問題があります。そこはもちろん地域の方へのつながりであるとか、非常に重要だと思いますが、そこが今どうしてもつながりが途切れがちであるという課題を認識しています。

あと、コロナの話も出てきています。先ほども、研修のテーマで防災がありました。今回でも災害ボランティアセンターの支援をしています。コロナ時代の災害支援、避難所運営。災害支援に行ったけど、コロナに感染したというような報道もなされています。こういった辺りのことも、もちろん災害ボランティアセンターの運営は、つながりのもとでやっていきますし、アナログの関係のもとで支援の人を受け付けて、ボランティアの方が助けに行く。非常にアナログな関係の中で、ここはオンラインということをももちろん可能性としては考えられますけれども、これからの時代ここをどうしていくのか。どういうふうに支援していくのか、ということを考えないといけないなという時代に来ていると思います。以上です。

【委員】

ありがとうございます。いくつか思ったことがあります。今、ちょうどお話の続きで、つながりから途切れがちの人をつなぐ人をどう育てるのか、ということを決回の会議で一緒に考えたいと思ってここにおります。

だから、どうやったら全員同じようにつながるかということではなくて、そういう状況が変わってきたこと、オンラインから漏れる人たちがこそつながらないと。まさにそうなんです。そこをつなぐ人をどう育てるかという、その視点を深めていけたらいいなと思っています。

この間ちょうど私の住んでいる地域では、福祉委員さんとかで、2カ月に1回、高齢者の方たちのお楽しみ会をする活動があるんですね。このコロナのことでそういうことができないのでどうしたらいいか、というのでその係の人たちが集まったんです。一応予算などもあるので、どうやって使っていくか、というところで、1人の方が「アサガオの種を渡そうよ」とおっしゃったんです。それは4月の終わりの話でした。アサガオの種だったら夏に向かってそろそろ町に出てきている。アサガオの種を植えてもらって、この花が咲く頃に何とか笑って会えたらいいねみたいなことも含めてやってみよう、という話が高齢者対象のところでありました。

私は子どもの放課後のことをやっているの、その立場として、それは私も乗りたいと思いました。そのときは、学校もストップだったので、子どもの放課後の場もストップしていました。だから、子どもにも配りたいからという話になって、では、その地域に住んでいる全部の家に配ろうよ、ということになり、アサガオの種を1軒ずつ渡すことになりました。そのときに何か伝えたいことをちょっとまとめてやろうとなりました。思いはそうやってこの花が咲く頃にみんなで見えるように、家で頑張ろうね、みたいなことです。

そのときに私がもう1個提案したのが、私が住んでいるところは西川という地域ですけれども、「西川いいとも」というLINEを1個立ち上げて、そこに自由に登録をしてもらって、「うちには、こういうふうにまいたよ」とか、「こういうふうに芽が出たよ」とか、最後に咲くところだけじゃなくてその過

程をできたら共有したいね。そうすることで、今、誰さんか分からないけどこうしているんだとか、そういう気配が感じられるつながりづくりもできるかもしれない。「実験だからやってください」とお願いをしました。

LINE を持っている人も持っていない人もいますけれども、持っていてもそうやって新しい試みにつないでいくのは、怖くないとか言ってもなかなか進んでいかないんです。それもやっぱり実験実験と言ってできた人が出会った人に「こうやるのよと教えてね」みたいなことで、ちょっとずつ増えていって、実際はまだ30人にも満たない形でやっています。そこで発信していくことで、感想も出てきました。こうやってどこかで誰かが花をこうしているというのが見えて、つながるっていいねという話も出てきました。

だから、顔を見合わせるだけではなくて、またそれを待ち望むようなオンラインのあり方というのもあったなと思います。

あと時間のことがあるのもう一点。竜王小学校の方でタブレットをみんなに持たせたり、オンライン授業をしたりしています。これは地域で知っている町会議員の方が、「尚子ちゃん、どう思う？」と。うちも今中学1年になりまして、上が高校3年です。「オンラインの授業が心配だ」とその方はおっしゃるんです。60代の方です。「子どもがもうスマホを使って、うちの孫もスマホを見て、あんなふうになったらこれから心配だ」と。

そのときに思ったのが心配とか不安というのにいっぱいいっぱいになっているところに、いや、もっとこういう可能性もありますよ、ということはどういうふうに見せようか、思ったのです。私の長女は近江兄弟社に入っているんですが、近江兄弟社は今年の1年生から、コロナは関係なかったんですが、たまたまオンライン授業でタブレットを持つことになってたんです。それ実験も兼ねていろんなことが1年生で始まりました。高校の方はちょっと置いていかれています。

1年生はオンライン授業が始まっていて、出会えないときに自分の似顔絵をみんながタブレットで書いて、それをクラスで共有するのです。それを私は見ていると本当にびっくりして、私自身も知らないオンラインの使い方がある。こういうことがこれからすごいスピードで出てくる。だから、その自分は知らないことに対する不安をどうやって共有して消していくのか、というのもすごく課題だなと感じました。

だから、「兄弟社でこういうことをやっているから、議員さんだったら何かグループを立ち上げてそういうのを学ぶ会とかされたらどうですか」と申し上げたんです。県もこれからされていくのに、モデルとしてこんなものもあります、あんなものもあります、というのが簡単に親しめるような試みもこれから必要なんじゃないかなと感じました。

【議長】

ありがとうございました。言い残したということはないですか、よろしいですか。

事務局からあったように、今期、教育委員さんとも一緒に話ができるということで、こういう広い視野でいろんなことに対してものを申せるようなことが市町でも社会教育委員さんの力によってできると、委員の話にあったように、少しずつ変わっていくのではないかと思います。

私が影響を受けたワークショップの師匠のホリスティック教育ということをもものすごく熱心に言わ

れたんですが、そのホリスティック教育で、全ての人が今、自分の立場で何ができるかという発想を持って行動を起こす必要があるというのが、理念の中にあります。今、まさにコロナの時代において、一人ひとりがそれをしようと思うと、先ほど申し上げた子どもの頃から自分で考え、自分で決めて、自分で行動を起こすという、本当に薄っぺらい経験を積み重ねて、小学校、中学校、高等学校をやっていく。そういった中で、教育を変える必要があるんじゃないか。ティーチャーがファシリテーターにならないと、先ほどおっしゃったつなぐ人というのは、絶対にそういう人は輩出しません。先ほど、副議長がおっしゃった、マスプロ授業は大学だからいいけど、と思います。

ヒントになるのが、今の話ではありませんが、SDGs、誰1人取り残さないという理念が世界共通としてある。そこにどうやって大きな言い方をすれば日本が乗っかっていくか。それを保育現場で思うのは、男女雇用均等法が三、四十年前にできたと思うんですが、いつまでたっても男性中心の社会だから、子育てというか子どもさえも教育できない。育休を取る、産休を取る。当たり前じゃないですか。でも、管理職としては「え？」と嫌な顔をしなくちゃいけない。前の職場でもそうでしたから。おかしい。だから、持続可能な社会をつくらうと思えば、大きなことを言いました、男女共同というか、その理念です。もっと女性の方が産休を取ることも育休を取ることも胸を張って、男子のイクメンとかそんなレベルじゃなくて、そういう社会を作らないと。

世界で気づいたら ICT とかは日本は2流3流の国になっていた。それには、今ほど申し上げたい、私の師匠がいったホリスティックの今を本当に考えて行動する。自分のできること、1mmでも0.5mmでも何か自分のできることをする。皆さん、これからそれぞれの所属先に帰って、今日の県の社会教育委員会会議で、こんな話題になった、ということをごひびきください。またフレキシブルな機会になると思いますので、どこかで会合を開いて。次の2月には、またお願いしたいなと思います。

うまいことまとめられなくて、いろんな意見が出ました。必ずこの会議は、一人ひとりの発言を保証したいと思うので、またご協力いただきましてやりたいなと思います。それでは、事務局にお返しします。

【司会】

議長、並びに委員の皆様、熱心にご審議いただきありがとうございました。それでは、閉会にあたりまして、生涯学習課長がごあいさつを申し上げます。

3 閉 会

- 課長挨拶
- 事務連絡